

挿絵を拡大して読みを深める

活用が広がる「国語デジタル教科書」。しかし、それをただ提示するだけでは、子どもたちに学びをもたらすことにはなりません。本連載では、事例をもとに、デジタル教科書の効果的な活用のしかたについて考えてみます。今回は、挿絵を拡大提示して読みを深める手立てに着目します。



東京都生まれ。横浜国立大学大学院教育学研究科修了。横浜市内の公立小学校教諭、主幹教諭を経て、現職。専門分野は、教育工学（授業設計、情報教育）、教科教育法。共著書に「タブレット端末で表現する協働的な学び」（フォーラムA）など。

1 挿絵を拡大提示する手立て

文章の読みを深めるために、大きくした挿絵を見せる手立ては、従来の国語の授業でも行われてきたものです。教師が手描きで準備した大きな挿絵を黒板に掲示しながら、学習を展開する様子がよく見られました。では、デジタル教科書を使えば、従来とは違う学習効果が得られるのでしょうか。

以前、一年一学期の物語教材「はなのみち」で、「『はなの みち』の劇遊びをしよう」という単元を実践したことがあります。デジタル教科書で拡大提示した挿絵を使いながら想像を広げて文章を読み、それをもとに簡単な劇遊びをするという学習です。今回は、この実践をご紹介します。

2 単元の指導目標

◎場面の様子について、登場人物の行動を中心に想像を広げながら読むことができる。（読む(1)ウ）

○語のまとまりや言葉の響きなどに気をつけて音読することができる。（読む(1)ア）

3 単元の指導計画

（全六時間）

▼第一時

「はなの みち」の範読を聞き、挿絵を手がかりにして、話の大体をつかむ。

▼第二～六時

動物たちの様子や会話を想像して、簡単な劇遊びをする。

ここで活用!

目に入る情報を絞るといった方法が有効です。

子どもたちは、次のように、くまさんと袋の関係を言語化していきます。

「くまさん、不思議そうな顔をしている」「何だろうって、思っているんだよ」

その後も、挿絵の部分拡大によって、物語とともに変化していく、くまさんの表情にもしっかりと気づき、様子について豊かに想像を広げることができました。

発言が落ち着き、「他のところも見てみたい」と言う子が出てきたら、元の表示に戻した挿絵を提示します。子どもたちは、新たなことに気づき、また発言が続くようになります。



◀図1：教科書P26の挿絵を表示したデジタル教科書の画面。



▲図2：図1の挿絵を、くまさんを中心に部分拡大した画面。移動ツールを使って拡大部分を動かしながら、くまさんから袋へ子どもたちの視点を移動させた。

という他の子の意欲を生み、授業の活性化につながります。授業では、くまさんの家にあるストーブを指し、「火がついている」と話した子がいました。すぐにその部分を拡大し、みんなで確認しました。自分の目で確かめることで納得が生まれます。季節が冬

4 活用のポイント

(1) 挿絵から読み取ったことを言語化

第二時には、教科書P26の挿絵からくまさんが何をしているのかを想像して言語化する学習活動を設定しました。教師は、「ここは、くまさんのおうちですね。中の様子を見てみましょう」と言いつて、電子黒板で、デジタル教科書の挿絵を提示しました。かわいくくまさんの挿絵（図1）が大きく映されるだけで、教室は大騒ぎです。

「あつ。くまさん、袋を持っているよ!」。そんな声が聞こえたら、しめたものです。すぐに挿絵を部分拡大し、くまさんの情報だけが画面に映るようにしました（図2）。話題を焦点化したとき、このように、 unnecessaryなものを隠し、

であると押さえることも、この場面では重要です。

その後の学習でも、挿絵を部分拡大したり動かしたり、第二場面と第四場面の挿絵を比較したりしながら、場面の様子への想像を深めていきました。

5 実践から分かること

挿絵の拡大提示により、挿絵から分かったことと叙述を引き合わせながら想像を広げる、という言語活動がより活発に展開できたように思います。

高学年では、挿絵など使わないとお考えの先生もおられるかもしれませんが、高学年でも、それに適した挿絵の活用が考えられます。例えば、六年「やまなし」では、挿絵をもとに、五月と十二月、昼と夜の違いや、谷川の深さなどを想像させることができます。私の経験では、これにより、「わけが分からない」と、教材と距離を置いていた子が、関心を示すようになりました。

デジタル教科書を活用して、これまで以上に、挿絵に描かれている情報を読むことに生かしたり、挿絵と文章とを関連させたりする授業に取り組んでみてはいかがでしょうか。